

ひきこもり家族教室の実践と評価 ～ルーブリックを用いてプログラムの有効性を探る～

斎藤まさ子¹⁾ 本間恵美子²⁾ 内藤 守³⁾
田辺 生子³⁾ 小林 理恵³⁾ 佐藤 亨²⁾

1) 長岡崇徳大学看護学部看護学科
2) 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科
3) 新潟青陵大学看護学部看護学科

Practice and Evaluation of Hikikomori Family Study Session ～Explore the effectiveness of the program using a rubric～

Masako Saito¹⁾ Emiko Honma²⁾ Mamoru Naito³⁾
Seiko Tanabe³⁾ Rie Kobayashi³⁾ Toru Sato²⁾

1) NAGAOKA SUTOKU UNIVERSITY, FACULTY OF NURSING , DEPARTMENT OF NURSING
2) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF CLINICAL PSYCHOLOGY
3) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY, FACULTY OF NURSING, DEPARTMENT OF NURSING

要旨

本研究は、A県内で募集したひきこもり状態の子ども（本人）の親で構成されたモデルグループを対象に、親が本人に理解的な対応ができるようになることを目指した家族支援プログラムを実施し、プログラムの有効性を探ること、さらにその際の評価基準となるルーブリックを作成することを目的とした。家族教室には、13人の親（男性6人、女性7人）が参加し、6回実施した。ルーブリックの評価結果からプログラムの有効性は立証できたが、次の3点が影響していたものと考えられる。①自助グループの中心的要素である、メンバー同士の対話による相互交流や体験の語りを重視したことが有効であった。②ルーブリックを用いることで、参加者個々の複合的な質的变化を詳らかにでき、さらに評価者間の間主観性を高めるとともに、誤った判断をするという危険性が回避できた。③子どもへの理解的対応につながらない要因として、親が子どもとのコミュニケーションが困難な場合が考えられた。

キーワード

ひきこもり、家族支援プログラム、パフォーマンス評価、ルーブリック

Abstract

This study targeted a model group of the parents of children in Hikikomori state (the individual) recruited in A prefecture. The purpose is to practice a family support program aiming to enable such parents to respond to the individual in an understanding manner in order to explore the effectiveness of the program and create a rubric that will serve as the evaluation criteria. Thirteen parents (six males and seven females) participated in the family classes, which were conducted six times. The results of the rubric evaluation established the effectiveness of the program with likely influences of the following three factors. (1) The focus on mutual exchange and narration of experiences through dialogue between members, which is a central element of the self-help group, was effective. (2) The use of the rubric allowed elaborating on the complex qualitative changes in each participant, further enhancing the inter-subjectivity of evaluators and avoiding the risk of erroneous judgments. (3) One factor that may not lead to an understanding response of parents is that they have difficulty communicating with their children.

Key words

hikikomori, family support program, performance evaluation, rubric

I はじめに

ひきこもり支援について竹中は、ひきこもりからの回復支援の基本的道筋として、まず家族によるひきこもり状態の人（子ども）への支援¹⁾を挙げている。それについて斎藤環は、親の権威により一方的に押さえこむことや、子どもを強制的に従わせる対応は、子どもの外傷体験にしかならない²⁾こと、さらに、家庭こそが子どもの唯一の居場所であることから、家庭の中では安心してくつろいでいられることが、その後の社会復帰を進めるうえで前提となる³⁾と述べている。また、親の批判や叱咤激励が鎮静化すると、子どもの心理的重圧が軽減し、回復に向けたプロセスを歩み始めることが報告されている⁴⁾。このように、親の対応が子どもの回復に大きく影響していることがわかる。

一方、自助グループひきこもり親の会（以下、会）に参加する親を対象とした研究によると、親の子どもへの対応が理解的なものに変化するまでのプロセスには特徴がある⁵⁾。そのプロセスにおいて、すぐには子どもの行動の変化が見られないことが多く、親は様々な葛藤で、大きく揺れることがある⁶⁾。そのようなときに、会に参加することにより強い支持や安心感を得ることができ、プロセスを前進させるのが自助グループが持つ力であり、家族支援を考える場合の、大きな手掛かりになると考えられる。

研究者らは、この自助グループが持つ力を活用したひきこもり家族支援プログラムの実践と評価を計画した。プログラムの有効性を検討する方法として、ルーブリックを評価基準としたパフォーマンス評価がある。松下によると、ルーブリックは初歩的な課題から複合的な課題まで対処できる能力を大きな幅を持った連続体とし、その中で質的な差異を見出すための判断を明示し共有するためのツールである⁷⁾。プログラムの到達目標としたのは、

ひきこもりに対する理解やそれに対する向き合い方、子どもへの関わり方、自身の心情のコントロールといった、知識やスキル、態度などを統合し、特定の文脈で発揮するという高次の能力であることから、複数の観点によって構成されたルーブリックが評価基準として適しているものと考えられた。

ひきこもり家族教室に関する研究はいくつか見られるが、いずれも参加者の自己認識に依拠するアンケートや、チェックリスト的なものにとどまり、ルーブリックを用いてパフォーマンス評価を行い、さらにその結果からプログラムの有効性を検討した研究は、検索した限り見当たらない。また、このような目的に使用可能なルーブリックも見当たらない。

本研究は、A県内で募集したひきこもり状態の子どもの親で構成されたモデルグループを対象に、自助グループのもつ力を活用し、親が子どもに理解的な対応ができるようになることを目指した家族支援プログラムを実施し、プログラムの到達目標の評価を通して、その有効性を明らかにすることを目的とした。また、その際の評価基準となるルーブリックを作成することも目的とした。

II 方法

1. 家族教室プログラムの実施期間

平成28年3月から5月の隔週日曜日に6回実施した。2グループに分け、1つは第1、第3日曜日に実施し、他グループは第2、第4日曜日に実施した。

2. 研究参加者の募集方法

A県精神保健福祉センターと共催し、A県内の保健所や公的支援機関に、家族への研究協力をよびかけるチラシの配布を依頼した。さらに、政令指定都市であるB市こころの健康センターと共催し、市内各地区やひきこもり支援センターなど支援機関へのチラシの配

布を依頼するとともに、保健師会や民生委員会に参加し協力を要請した。

募集用のチラシには、プログラムの有効性をより適切に評価するために、それまでに支援機関や家族会へのアプローチ経験があまりない人と記した。定員は20人とした。

3. 家族教室プログラムの全体像

1) 家族教室プログラムの枠組み

本研究における家族教室プログラムは、家族が混乱している状態から、子どもへの本来の援助能力が発揮できるようになるための心

理教育的アプローチ⁸⁾を理論的基盤とするとともに、到達目標と連動させながら作成した。また、自助グループが兼ね備えている力である、親自身がメンバーに受容され心理的に安定することや、体験を語り聴くことによって得られる体験的理解を重視した。さらに、自ら設定した目標を家で実践し振り返りを行う事や、ひきこもりについての正しい知識の獲得、本来の親自身の生活を取り戻すために動作法を用いて必要なストレスマネジメント力の回復促進などをプログラムの要素として組み込んだ(図1)。

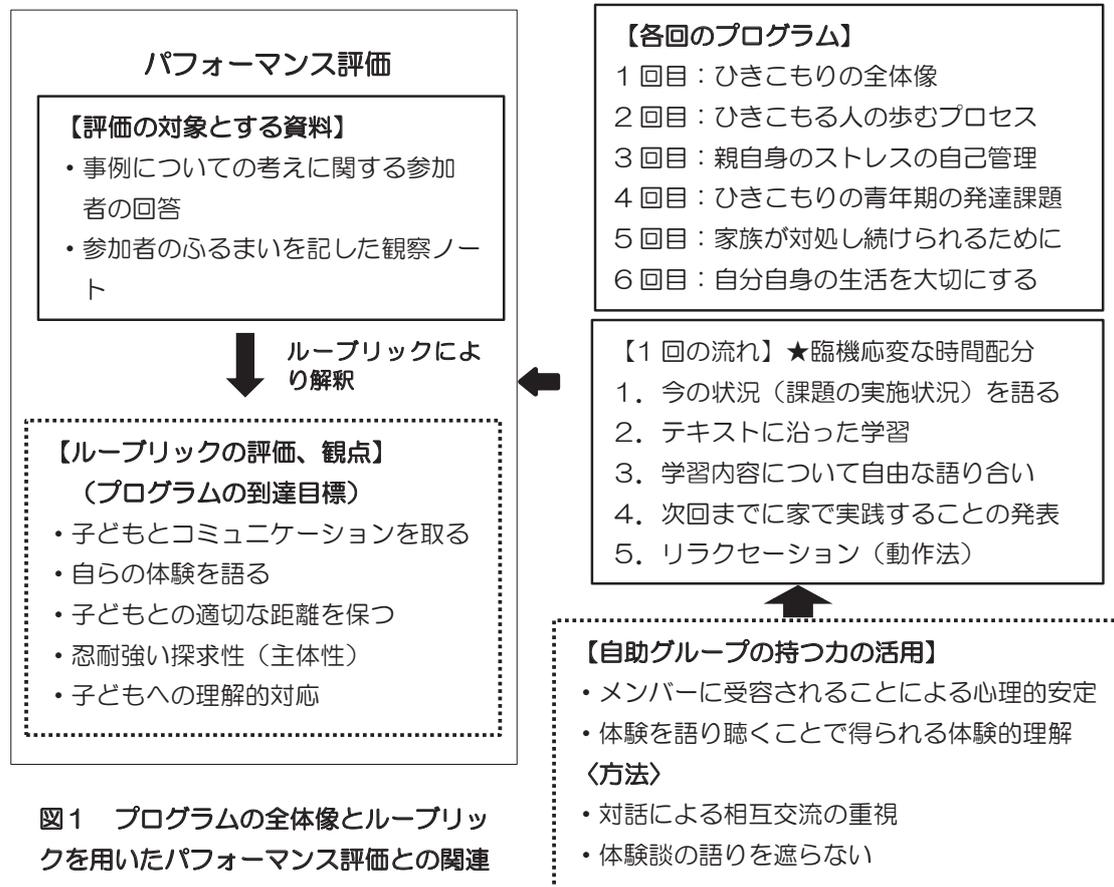


図1 プログラムの全体像とループリックを用いたパフォーマンス評価との関連

2) プログラムの到達目標

本プログラムにおいて、親がひきこもる子どもへの対応において、批判的なものから理解的なものに変化するために必要なものとして、【子どもとコミュニケーションを取る】こと、【自らの体験を語る】こと、【子どもとの適切な距離を保つ】こと、【忍耐強い探求

性(主体性)】、【子どもへの理解的対応】の5つを挙げ、それを観点とした。

(1) 子どもとコミュニケーションを取る

ひきこもりの場合、本人と家族のコミュニケーションが途絶えている場合が多く、斎藤環は、日常の生活のなかで、まず互いの会話を復活させるのが最優先課題⁹⁾だと述べてい

る。ひきこもりの場合、親子一緒に暮らしながら会話がないと、子どもの低い自尊感情と親の怒りが相互に投影し合い、相互の誤解を招きやすいと述べ、誠実な態度でできるだけ子どもの気持ちが高くなるような形で、対面で会話をすることを勧めている³⁾。斎藤らの研究においても、家族との日常的なコミュニケーションをとおして家族の一員として遇される日々が、子どもの回復に向けた力になっていたことを報告している⁴⁾。

(2) 自らの体験を語る

佐藤は、苦しいことを人に語るということは、語ることばを紡ぐ作業のなかで、思考を再構成することであり、さらに、苦しい事態に対応するためのストラテジーを主体自身が探すこと、そして新しい意味を発見することである¹⁰⁾と述べる。斎藤らのひきこもりの母親を対象とした研究においても、会で体験を語ることで、子どもとの関わりについて気づきを得ていることが示されている⁵⁾。

(3) 子どもとの適切な距離を保つ

子どもへの家族の対応として、距離の近さが課題としてあげられることが多い。斎藤環は、ひきこもりの両親それぞれが、自分の世界を確保する必要性について言及している。特に母親については精神的健康に役立つとともに、母親が子どもの気持ちに反して外出しても、自分とは異なる個人として母親を認知するようになり、それを受け入れることが治療上きわめて重要であると述べている³⁾。子どもの言動や、わずかな状態の変化に一喜一憂して振り回されている状態は、子どもと距離が近づきすぎている状況ともいえ、むしろ長期的な展望でどっしりと構えることが求められている²⁾。

(4) 忍耐強い探求性(主体性)

ひきこもりは、すぐに改善する解決策や治療法はなく、親自身が長期にわたり主体的に行動し、子どもとどう対峙していくかを考えていかなければならない。池田は、両親の諦

めない行動の重要性について事例を用いて説明している¹¹⁾。ひきこもりという特性から、親の役割として、諦めないで外部の支援機関とつながり続けることが求められる。

(5) 子どもへの理解的対応

船越は、子どもは親に理解されることを望んでおり、親が子どもを理解できるようになると両者の関係も変化することから、子どもを理解することの重要性を述べている¹²⁾。斎藤らの研究でも、親が子どもとの関わり方を見出すプロセスにおいて、自らの希望を押し付けるのではなく、子どもの立場から考え理解する努力をし始める時点がターニングポイントであり、そこから親は子どものポジティブな変化を実感することができていたことが示されている⁵⁾。また、子どもを対象とした研究においても、親が批判的な態度から理解的な対応に変化することで、子どもが回復に向けて動き出すことが報告されている⁴⁾。

3) 家族教室の内容や運営の工夫

(1) 実施の概要

研究者らが所属する大学を会場に、日曜日の午後13時から16時まで実施した。各回の流れは、1) 今の状況について語る、2) テキストに沿った学習、3) 学習内容について自由な語り合い、4) 次回までに家で実践することの発表、5) リラクゼーション(動作法)の実施の5つのフェーズからなり、2回目からは1)は4)の課題の実践の振り返りについて語ることにした。できるだけ参加者の語りを遮らないことや相互交流を尊重する観点から、終了時間の厳守以外は、時間配分について臨機応変に対応した(図1)。

当日は、研究参加者と研究班2人で構成され、研究班の1人はファシリテーター役として参加者ととともに輪になって座り、他1人は輪から外れた場所で会の様子観察や、参加者の言動や気付きなどを観察ノートに記すことと、動作法を主としたリラクゼーションの指

導役を担った。また、参加者の緊張をほぐすために、花を飾り、セルフサービスのドリンク類や菓子を用意した。休憩時間は、参加者同士の交流や参加者と研究者らが気楽に語り合える時間とした。

(2) テキストについて

テキストは、本プログラム実施にかかわる研究者らが、プログラムに沿うように作成した。リラクゼーションは、臨床動作法が新潟県中越地震後の被災者や支援者のセルフケア向上への有効性が示唆されたという報告¹³⁾から、A県内の臨床動作法研究会の主催者のスーパーバイズを得て、簡便にできる動作法や呼吸法などを別冊として提示した。

4. ルーブリックの構造と作成の手続き

本プログラム開始前に教育評価論を専門とする研究者にスーパーバイズを受けて、5つの観点と4段階のレベルのものを試作した。その後、評価時点ごとに、観点とレベルはそのままに、より評価者間の合意がとりやすく、参加者の水準を適切に捉えることができるよう記述語を調整した。

1) 観点

ルーブリックを作成する際には、評価したいことを明確にしてそれを観点到に反映させることが重要である¹⁴⁾。そのため、プログラムの到達目標と同一の5つの観点を設定した。

2) レベルと記述語

レベルは4段階で構成した。レベルは上からレベル3「その意義を理解した上で行動できる」、レベル2「概ね行動できる」、レベル1「十分ではないものの行動できる」、レベル0に満たない段階をレベル0とした。それに応じて、観点ごとにその水準を言語化した記述語を研究グループで作成した。

3) ルーブリックの調整

ルーブリックの記述語は、評価時点（プログラムの1回目、4回目、6回目終了後の3時点）ごとに研究グループで見直しを行う（キャリブレーション）という手続きを経て作成された。また、各自が事前に点数を付けて集まり、採点結果について話し合い、点数に違いがある場合は合議の上点数の統一化を図った（モデレーション）。

最終的なルーブリックはⅢ「結果」で紹介する。

4) 評価するパフォーマンス

本研究の研究者らによる参加者の評価は、「事例についての考えを問う質問紙（事前事後配布）」と「参加者のふるまいを記した観察ノート（毎回記録）」をとおして行った。

(1) 事例についての考えを問う質問紙（事前事後配布）

家族教室プログラムの実施前後に、参加者に質問紙を配布して、ひきこもり状態の子ども事例を提示し、その対応について選択回答式と自由記述形式で回答を求めた。具体的で真正性の高い文脈を与え、それに対して参加者が親の立場からどのように考えるかを問う構成になっている。質問項目は、ルーブリックの5つの観点对応するもので構成されている。【子どもとコミュニケーションを取る】は、“声をかけるといつも怒鳴り返してくる子どもに対して、それでも声をかけるかどうか（選択式）”と“その判断理由（自由記述式）”の回答を求めた。以下、同様の構成である。【自らの体験を語る】は、“もしも親の会に参加した場合、自らの体験を語るかどうか”、【子どもとの適切な距離を保つ】は、“社会的なつきあいとして、子どもを置いて出かけなければならなくなった時に、出かけるかどうか”、【忍耐強い探求性（主体性）】は、“相談機関に行ったが期待した解決策を提示されることなく、「一緒に考えてい

きましょう」といわれたが、その後も継続して通うかどうか“、【子どもへの理解的対応】は、“親が、仕事から帰るとゲームをしている子どもの姿をみて、仕事を探すように言いたくなかったが、それを言うかどうか”をそれぞれ選択式で問い、その判断理由を自由記述式で回答を求めた。

(2) 参加者のふるまいを記した観察ノート

事前に参加者の了解を得て、観察役の研究者が、参加者の表情や態度、ことば、先回との違いなど気付いたことを記述した。さらに、その回の終了後に観察役とファシリテーターと振り返りを行い、その内容を記述した。

5. 各回のテーマと観点との関連

各回に設定したテーマと観点との関連については、【子どもとコミュニケーションを取る】は、1, 2回目でひきこもりという現象と、子どもが社会に出るまでに歩む心理社会的プロセスを学習するなかで、子どもにとって家族とのコミュニケーションが重要であることを学習する。【自らの体験を語る】は、各回で体験を語りあうが、体験を語ることがどうだったかを6回目で語り合い、その意義について確認する。【子どもとの適切な距離を保つ】は、2回目の本人の歩むプロセスの段階で年齢相応に対応することの必要性を知識として学び、6回目で自分の生活を大切にすることが子どもの回復にとっても役立つことを学習する。また、4回目の青年期の発達課題を学習することで、知識レベルの理解を意図した。【忍耐強い探求性(主体性)】は、1, 2回目でひきこもりから回復するための特効薬的なものは存在しないこと、子ども任せで状況が改善することは困難であることを学習する。家族が諦めないで取り組むことの重要性への気づきを意図した。3回目でストレス管理として動作法を理論と実践で学習し、5回目では時間管理の大切さを学習する。【子どもへの理解的対応】は、本プログラム全体

にまたがる重要な到達目標であり、全回の参加によって、望ましい水準に到達可能と考えた。

6. 倫理的配慮

募集用のチラシには、家族教室は研究目的で行われることを明記し、匿名性の確保、途中棄権の自由とそれによる不利益はないことを記した。初回日に倫理的配慮を記した文書を配布し、口頭で説明を行った上で、互いに同意書を取り交わした。この研究は、新潟青陵大学倫理審査委員会の承認を受けて行った(2015009号)。

Ⅲ 結果

1. 最終版ルーブリック

評価時点としたプログラムの1回目、4回目、6回目終了後の3時点で共同研究者が集まり、家族教室の現状に適合するように繰り返し議論のうえ記述語を修正し、最終的に表1が作成された。例えば、試作の段階では忍耐強い探求(主体性)のレベル1では「支援を求めながら、子どもの状態に合わせてどうすればいいか、少し自分で考え実行することができる」とした。レベル2では、下線部の『少し』を『概ね』とし、程度の差のみで分けていた。しかし、参加当初は“子どもの状態に合わせて考える”というよりは、“どうすれば回復するか”という方法論を求める参加者が少なくない状態であり、これを表現する必要があった。その結果、レベル1を「方法論的支援を第一目的として支援機関を活用するが、子どもの状態に合わせてどうすればいいか、少し自分で考え実行することができる」とした。

2. 参加者について

参加者は13人で、夫婦が4組(40歳代2組、60歳代と70歳代各1組)、父親2人(50歳代、

表1 ひきこもり状態の子どもへの対応力評価ルーブリック

観点	子どもとコミュニケーションを取る	自らの体験を語る	子どもとの適切な距離を保つ	忍耐強い探求 (主体性)	子どもへの理解的対応
レベル3	子どもと挨拶や食事のとき等、声かけをすることができる。その行為は、子どもの関係改善および子の心理的安定のために効果的であることを理解した上で行われている。	体験と関連付けながら自分の感情を語るができる。その行為は、自らの心理的安定や子の気持ち、起こっている現象の整理に効果があることを理解したうえで行われている。	子どものことが気になっても立場必要を外出はできており、そうすることが子との適切な距離を保つために有効であることを理解したうえで行われている。	支援を求めながら、子どもの状態に合わせてどうすればいいか考え自分で選択し、実行することができる。そうすることが子の回復にプラスになることを理解したうえで行われている。	子どもへの理解的対応の必要性について理解するとともに実感し、迷いながらもそれに沿った対応をすることができている。
レベル2	子どもと挨拶や食事のとき等、概ね声かけをすることができる。	自分の感情を語ることができ、自らの心理的安定や子の気持ち、起こっている現象の整理に効果があることを理解していない。	子どものことが気になっても立場必要と思える外出(生活の糧となる事は除く)を概ね行えているし、自分のために行ったほうがいいことある程度理解している。	支援を求めながら、子どもの状態に合わせてどうすればいいか、概ね自分で考え選択し、実行することができる。	子どもへの理解的対応の必要性について概ね理解するとともに美感としてある程度わかり、それに沿った対応をするように心がけている。
レベル1	子どもに、挨拶や食事のときなど、文字やしぐさを通してコミュニケーションができるが、声かけをしようとしない。または、子の状態が落ち着いているときのみ、声かけができる。	体験を語るような場に行け、体験を語るが、自分の感情については語らない。	子どものことが気になっても立場必要と思える外出(生活の糧となる事は除く)を少し行えているが、外出が自分のために行ったほうがいいとは理解していない。	方法論的支援を第一目的として支援機関を活用するが、子どもの状態に合わせてどうすればいいか、少し自分で考え実行することができる。	子どもへの理解的対応の必要性に納得がいかないが、そうすることが効果的だということとはわかり、自分の価値観で関わる頻度と表現は軽減している。
レベル0	子どもに声をかけることができない。	体験を語るような場にいけるが、体験を語ることにはしり込みする。	子どものことが気になり、立場上自分に必要だと思おう行動がとれない。	何とかしようとして行動を起すことが、暗中模索状態である。	子どもの気持ちを無視して、自分の価値観で子どもに関わっている。

70歳代各1人)、母親3人(40歳代、50歳代、60歳代各1人)であった。13人を参加者の希望どおりに8人と5人の2グループに分け開始したが、参加者の希望で4回目より6人と7人のグループ編成となった。子どもの年齢は、10歳代が5人、20歳代が5人、40歳代が3人であり、ひきこもり期間は5年未満が7人、5年以上10年未満が3人、10年以上が3人であった。

3. 事例についての考えを問う質問紙調査の結果

本研究において目標とする能力は、前述の5つの観点においてレベル3「自ら意義を理解して行動できる」に到達できることである。それらを質問紙への回答のみならず、観察ノートの記録も含めて評価しようとするものであるが、この質問紙への回答をプログラムの事前事後で比較し、参加者の変化を概観する。まず、【子どもとコミュニケーションを取る】

(「声をかけるかどうか」)は、かけると回答した参加者が事前7人から事後10人に増加していた。理由については、事前は“会話がなくならないように”、“少しは気分が変化する”などで、事後は“誠意をもって声をかければいつかは理解してもらえる”、“会話が必要だと学んだから”などであった。【自らの体験を語る】(「語りたと思うかどうか」)は、そう思うと回答した人が、事前は10人で事後は11人であった。理由については、事前は“イメージをつかみたい”、“対応が正しいか知りたい”などで、事後は“話すことで楽になるから”、“対応が見えてくるかも”など話すことの効果に関連付けた記述がみられた。【子どもとの適切な距離を保つ】(「出かけるかどうか」)は、事前事後とも13人全員が必要時にはでかけると回答した。理由については、事前は“説明すればわかる”、“自立を促す”などで、事後は“自分の気分転換”、“わたしはわたし”、“親は元気な方がいい”と、事前

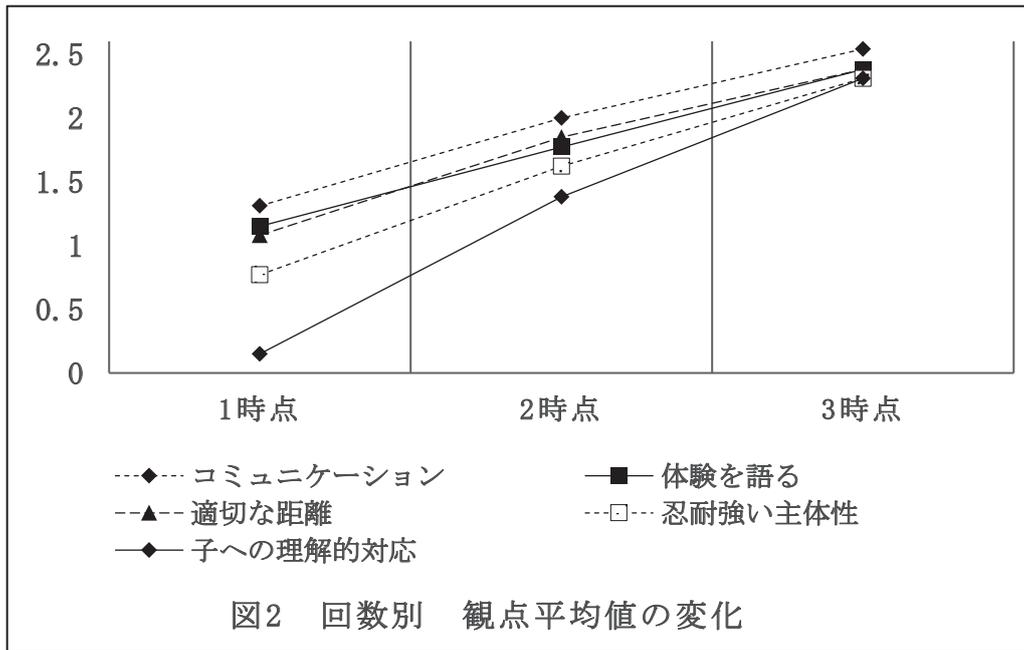
事後で視点が子どもから親自身へと転換していた。【忍耐強い探求(主体性)】(「相談に通うかどうか」)は、相談に通うと回答したのが事前7人、事後9人であった。理由は、事前は“別の解決方法があるかも”、“良い方法が見つかるかも”などで、事後は“即効性は望めないとわかったので”、“いつか効果が出る”、“子の支援者なので”などであった。【子どもへの理解的対応】(「仕事を探すように言うかどうか」)は、言わないと回答したのが事前7人から事後11人に増加していた。理由は、事前は“仕事をしない影響を子どもが一番わかっている”、“その気にならなければ言い争いになるだけ”などで、事後は“充電期だと思うから”、“子ども自らの行動を望む”、“子どもの気持ち次第であるから”などであった。このように、特定の行動をとるのかに関する選択式の回答の変化はさほど見られなかったが、その理由に関する自由記述式の回答には質的な差異が見られた。

4. ルーブリックによる評価結果

参加者13人の質問紙への回答と観察ノートの記録を通したルーブリックによる評価を、3時点で実施した。図2は、各時点の評価点の平均値の変化を示したグラフであり、5項目すべてにおいて点数が上昇した。観点別に得点の変化を参考にして検討する。

1) 子どもとコミュニケーションを取る

ルーブリックによる評価は、1時点1.31、2時点2.0、3時点2.54と上昇していた。1時点では、レベル0が1人、レベル1が7人、レベル2が5人であり、3時点の評価は、レベル1は1人、レベル2が2人、レベル3が1時点の0人から9人に増加した。1時点でレベル0の1人については、「感情的に認められないから声をかけない」という発言があったが、3時点ではレベル3に上昇しており、回を追うごとに家で子どもと交流したことを話すようになり、「声をかけることの意義を



理論的に理解した」という発言があった。レベル1の1人、レベル2の2人については、初回と3時点の評価で変化がなかった。レベル1の1人は、家族内での子どもへの対応が統一されておらず、他成員から母親への支持がないために、感情的な不安定感が日常的に起こっている状況が語られたことから、概ね声をかけるに至っていないと考えられ、レベル1とした。レベル3では、「最近はおはんだよ」とハイと返事をしてくる、「おはよう」と挨拶すると返事が返ってくる、「子どもがいやがることを言わないと茶碗洗いなどの手伝いをしてくれ、こちらの対応で変わることを実感している」、「手伝いに対して努力してありがとうと声をかけたら、子どもの表情が柔らかくなったようだ」などの発言がみられた。家での課題について、ある参加者は「笑顔で声をかける」を実践した。「出かけたから一緒に行って欲しい」と笑顔で言ったら、翌日一緒に行き買い物をした。久しぶりで嬉しかった」という報告があった。

2) 自らの体験を語る

ループリックによる評価は、2時点1.15、2時点1.77、3時点は2.38と上昇していた。

1時点は、レベル0が2人、レベル1が7人、レベル2が4人であった。レベル0の2人のうち、1人が「個々の事例は違うので参考にならない」と質問紙の回答に書いており、他1人は「話すことが苦手」と語っていた。3時点の評価は、レベル1が1人、レベル2が6人、レベル3が6人であった。1時点にレベル0だった2人のうち、「個々の事例は違うので参考にならない」と回答した人はレベル3に上昇し、「色々な人の話が聴けて良かったという思いから、話ができよくなった」と語っていた。また、「話すことが苦手」と語った人は、レベル1に上昇した。自宅で子どもと触れ合ったエピソードや子どもの変化について、筋道立てて簡潔に語っていた。他レベル3の意見として、「参加するごとに話した方がいい、話を聴いてもらいたい、話して楽になった方がいいと思うようになった」、「話すことに意味があると習ったが、本当にそう思う。気分がすっきりしたし、わかってもらえてよかった」、「最初は自分たちが楽になるだけで、子どもの役に立つのか疑問を抱いていたが、子どものためになることを実感している」などが語られた。

3) 子どもとの適切な距離を保つ

ルーブリックによる評価は、1時点1.08、2時点1.85、3時点2.38であった。1時点は、レベル1が12人、レベル2が1人であった。事前事後の質問紙の回答では、全員が社会的な行事には遠方であっても参加する方を選択している。しかし、社会的なイベントなどには物理的に距離は取れるものの、回数が増え対話を繰り返す中で、心理的な距離をとることの効果については気づけていないことが伺えた。例えば、「子どもが苦しんでいるのに自分だけがしたいことをしていていいのか」、「自分の家だから、子どもの部屋が汚いので掃除する」、「検定試験を受けるために勉強すると言いながら、その様子が見られないため叱咤激励している」、「行動の一つひとつにイライラする」、「子どもがいてくれるだけで嬉しい」などである。4回目頃から、「息子と離れる時間があると気分転換でき、やさしくなれる」など、自らの気持ちについての発言が出るようになった。3時点の評価は、レベル1は0人、レベル2は8人、レベル3が5人であった。レベル2では、「余裕が出てきて、子の気持ちを受け止めることがつらくなってきた」、「半分あきらめた、それが適切な距離かな」、「自分たちを癒す時間が必要だと思う」、レベル3では、「毎朝学校に行くかどうか心配だったが、自分が変わることで今は休んでも次には行けるという安心感がある」、「子どもの将来を考えると子どもは子どもだ、自分たちも旅行して癒す時間を作りたい」、「夫婦仲の問題かもしれないと思い、出かけるときは一緒に出ることにした」などの前向きな変化についての発言が聞かれた。この回を学び、ある参加者が『「自分のやりたいことをやる」と家で目標を決めて、映画を見に行き、帰ってから子どもたちにコメディだと思ったらホラーだったと言ってみんなで笑った」という実践報告があった。

4) 忍耐強い探求（主体性）

ルーブリックによる評価は、1時点0.77、2時点1.62、3時点2.38であった。1時点は、レベル0が5人、レベル1が6人、レベル2が2人であった。過去に相談の場で傷つき体験をしており、参加についても迷いながら、「とりあえず1回参加してみようと思った」、「解決の方法を知りたくて来た」などの発言があった。3時点の評価は、レベル0は1人、レベル1と2がそれぞれ2人、レベル3が8人であった。「道のりは遠いが勉強していくしかない」、「人任せでなく、家族にしかできないことだから」という発言が聞かれた。観察ノートには、「自分たちの力で何とかしなければと考えて動いていると感じた。メンバー同士のつながりからくる積極的な姿勢ではないか」と家族同士というつながりと主体性との関連について記されていた。

5) 子どもへの理解的対応

ルーブリックによる全体評価は、1時点0.15、2時点1.38、3時点2.31に上昇した。1時点は、レベル0が11人、レベル1が2人であった。「子どもを見ているとイライラする。行動が理解できない」、「働く身体があるのに怠けていると思ってしまう」、「早く外に出て仕事をしてもらいたい」、「周囲から言われるままに叱咤激励してきた。自分ではどうしていいかわからなかった」などの発言が聞かれた。3時点の評価は、レベル0と1が各1人、レベル2が4人、レベル3が7人であった。レベル0の1人は1時点から変化せず、レベル1の1人はレベル0から上昇していた。この2人は、家族メンバー間の子どもに対する向き合い方が一致していないことで、子どもが安心できる環境づくりができないこと、さらに、会で理解的な対応の効果について納得できても、帰宅し家族メンバーの意見に触れると自らも揺れ動いてしまうことを語ってくれた。レベル3の7人は、全員が初回はレベ

ル0の人たちであった。「子どもがやる気にならないとだめだと開き直ったら楽になった」、「今まで自分の思いを押し付けていたように思う」、「自分が変わることでも子どもも精神的に余裕が出てきたようだ」、「最初に行くべきところは学校と思っていたが、今はいるべきところは家だって変わってきた」などの、自らの変化が子どもの変化につながることを実感する発言が聞かれた。

6) 自助グループの持つ力の活用について(観察ノート)

観察ノートに記載されている内容から関連するものを拾った。「自分だけじゃないと安心したいと思って来ている人がいることがわかった」、「ここにきて聴いてもらって人の話を聴いて、ヒントが得られて嬉しい」と少し涙ぐみながら話していた、「感情の語りがかなり率直になっている。同じ体験者同士が聴き、語り、楽になる体験ができたからではないか」という記述があった。また、「他者の話から自分との共通点を見つけ共感したり、他者の話への意見や自分の状況を語ったりと、他者の話が大きなプラスになっていると感じられた」、「互いに言葉がけや拍手などでねぎらうという、グループとしての機能も発揮されており、参加者の心の安定につながっていると感じた」と書かれていた。

IV 考察

家族支援プログラムを実践して、ループリックで設定したすべての観点において一定程度の効果が見られた。その要因について検討する。

1. 自助グループの持つ力の活用

ひきこもりの家族は、ひきこもりに対する社会の認知度の低さから、支援を求めようにも情報が得られない体験や、相談機関で批判

的対応を受けるなどで、先の見えない混乱状態のなかで自尊感情が低下している場合が多い⁵⁾。ひきこもり家族支援プログラムでは、図1にあるように、自助グループが持っている力を活用しながら実践した。「参加するごとに話した方がいい、話を聴いてもらいたい、話して楽になった方がいいと思うようになった」、「話すことに意味があると習ったが、本当にそう思う。気分がすっきりしたし、わかってもらえてよかった」ということばがきかれたが、安全に体験を語りつくせる場であり、それをメンバーに受け止められる場であることが大きな意味を持っていたと考えられる。

また、評価の1時点では「見ているとイライラする」、「働く身体があるのに怠けている」などと、子どもの生活行動について批判的であったが、3時点では「今まで自分の意見を押し付けていたように思う」、「最初に行くべきところは学校と思っていたが、今はいるべきところは家だって変わってきた」など、子どもへの批判的な関心から自らの気持ちの変化に視点が移っている。船越は、親は子どもの現実を受け入れられるようになると、子どもを変化させるのではなく、自分自身が変わる必要性に気付くと述べている¹⁵⁾ことに合致する。そして、「自分が変わることでも子どもも精神的に余裕が出てきたようだ」と、自らの変化が子どもの変化につながることを実感するという、知的な理解から体験的理解に変化していることがわかる。

このように、子どもに理解的な対応ができるようになるには、親自身が心理的に安定することから始まる。そして、自助グループの持つ力である、気持ちのわかる体験者同士の強い支持のもとで、語りつくし受け止められることで変化のプロセスを歩むことができたものと考えられる。

2. ループリックを用いたことの効果

本研究においてループリックを作成したこ

とにより、得られた利点は2つある。

第一に、参加者のアウトプットや、プログラム参加中のプロセスに現れる複合的な変化を、統一的な評価基準から縦断的に捉えることができた点である。3回の評価を通して、記述語に多少の修正はあったものの、同一のルーブリックを用いることで、評価者が参加者個々のレベルの進み具合を観点別に知ることができた。質問紙の事前事後の変化をみると、望ましい選択項目を選んだ人数は実施前後でさほど変わらなかったが、その理由に関する質的な回答に対するルーブリックを用いた評価では、5つの観点すべてにおいて全体の平均値が上昇していた。すなわち、単純な正解不正解では見出すことのできない質的な変化を、ルーブリックによって詳らかにできたといえる。

第二に、それぞれ異なる専門領域を持つ研究グループの合意形成と鑑識眼の醸成である。ルーブリックは、評価者の主観が入るため、評価者の恣意的で独断的な評価を排除し、間主観性を高める工夫が求められる¹⁴⁾といわれている。本研究では、プログラムの初回（1回目終了後）、中間（4回目終了後）、最終（6回目終了後）と3時点で評価を行った。そこで、個々の評価者が採点結果を出し合う場合に判断の根拠を述べ合い、評価の違いがあった場合はどこに判断の違いがあるのかを、それぞれの評価者の視点から述べ合うことで、基準の理解につながるとともに、恣意的で独断的な評価を回避でき、信頼性を高めることに貢献したのではないかと考えられる。これはすなわち、評価者間の間主観性を高めることにつながったと考えることができる。また、記述語とその意味するところを全員で確認して作成したが、その後、実践してみて評価しにくいところを検討し合い修正した。そのことにより、評価する側が参加者の言動の意味をより深く理解できるようになり、誤った判断をするという危険性が回避されたといえる。

3. 実践から見えてきた課題

家族内の子どもへの向き合い方が一致していない参加者2人について、「子どもとコミュニケーションを取る」と「子どもへの理解的対応」において、評価の1時点と3時点で変化がなかった。知識レベルだけでは、理解的対応という行動レベルまで到達することは困難であることがわかる。子どもとコミュニケーションを取ることの重要性について斎藤環は、子どもが発しているメッセージを受け取り、それを共感とともに理解することは、家庭内にコミュニケーションがあってはじめて可能になる¹⁶⁾と述べている。子どもの心情を理解し、それを尊重した対応ができるようになるには、子どもとのコミュニケーションが不可欠なのである。家庭内で起こっている様々な背景によって、子どもとのコミュニケーションが困難な場合には、家族調整を含めた支援の検討が求められる。

V 結論

ルーブリックの評価結果からプログラムの効果は立証できた。下記が影響していたものと考えられた。

1. 自助グループの中心的要素である、メンバー同士の対話による相互交流や体験の語りを重視したことは、気持ちのわかる体験者同士の強い支持のもとで変化のプロセスを歩むことができ、知的な理解から体験的理解に進展するとともに、子どもへの理解的対応につながった。
2. ルーブリックを用いることで、プログラム参加中のプロセスに現れる参加者個々の複合的な質的变化を詳らかにできた。さらに、評価者間の間主観性を高めるとともに、キャリブレーションとモデレーションにより、参加者の言動の意味をより深く理解できるようになり、誤った判断をするという危険性が回避できた。

3. 子どもへの理解的対応につながらない要因として、親が子どもとのコミュニケーションが困難な場合が考えられた。

VI おわりに

本研究はプログラムの評価をねらいとしているため、参加者が意識することを避ける意味で説明を控えて実施したが、ループリックを参加者に提示していれば、参加者が評価主体として自らの学習について自己調整していくことができるため、より学修が進展したものと考えられる。今後は、到達目標を共有した場合の効果について検証していきたい。また、動作法をベースにしたリラクゼーションの効果について、述べることができなかつた。今後、資料を元に検討していきたい。

謝辞

本研究に際し、ご協力をいただきました家族教室参加者の皆様に心より御礼申し上げます。

本研究は平成26年度から平成28年度科学研究費補助金基盤研究(C)(No.26463511)の助成を受けて行いました。

文献

- 1) 竹中哲夫. ひきこもり支援論 人とつながり. 社会につなぐ道筋をつくる. 36. 東京: 明石書店; 2010.
- 2) 斎藤環. 社会的ひきこもり－終わらない思春期－. 111-129. 東京: PHP新書; 1998.
- 3) 斎藤環. 社会的ひきこもり－終わらない思春期－. 129-150. 東京: PHP新書; 1998.
- 4) 斎藤まさ子, 本間恵美子, 内藤守, 田辺生子, 佐藤亨, 小林理恵, ひきこもり状態の人が支援機関に踏み出すまでの心理的プロセスと家族支援. 家族看護学研究. 2018; 24(1): 74-85.
- 5) 斎藤まさ子, 本間恵美子, 真壁あさみ, 内藤守. ひきこもり親の会で母親が子どもとの新たな関わり方を見出していくプロセス. 家族看護学研究. 19巻(1): 12-22. 2013.
- 6) 小野修. ファシリテーターのためのマニュアル 子どもとともに成長する不登校児の「親のグループ」. 96-97. 名古屋: 黎明書房; 2000.
- 7) 松下佳代. アクティブラーニングをどう評価するか. アクティブラーニングの評価. 松下佳代, 石井英真編. 3-22. 東京: 東信堂; 2016.
- 8) 後藤正博. 家族心理教育から地域精神保健福祉まで－システム・家族・コミュニティを診る－. 97-100. 東京: 金剛出版; 2012.
- 9) 斎藤環. 社会的ひきこもり－終わらない思春期－. 150-163. 京都: PHP新書; 1998.
- 10) 佐藤康子. 苦しみと緩和の臨床人間学－聴くこと、語ることの本当の意味－. 49-54. 京都: 晃洋書房; 2012.
- 11) 池田佳世. 新「困った子」ほどすばらしい. 15-16. 東京: ハート出版; 2007.
- 12) 船越明子. ひきこもり 親の歩みと子どもの変化. 48-50. 東京: 新曜社; 2015.
- 13) 吉澤美弥子, 織田島純子, 大原薫. 災害支援における臨床動作法の有効性(2)現地支援ボランティア活動における臨床動作法の活用から. 臨床動作学研究. 2006; 12: 1-10.
- 14) 小野和宏, 松下佳代. 初年次教育におけるレポート評価. アクティブラーニングの評価. 松下佳代, 石井英真編. 26-43. 東京: 東信堂; 2016.
- 15) 船越明子. ひきこもり 親の歩みと子どもの変化. 57-59. 東京: 新曜社; 2015.
- 16) 斎藤環. 社会的ひきこもり－終わらない思春期－. 92-108. 京都: PHP新書; 1998.